

# 実践構想

「院生（修士１年）の研究テーマ」

# 道徳における自己評価力の育成

～ICT と OPPA の活用を通して～

学習デザインコース 井尾 雅昭 指導教員 本所恵 川谷内哲二

## 1. 研究の目的

統合的道徳教育を基にした授業において、子どもの道徳的価値に対する学び

(価値観の変容) およびその自己認識を具体的なデータで示して明らかにする

## 2. 研究の背景

道徳の時間



特別の教科道徳

検定教科書と評価が導入

I:教科書教材をどのように使うか

II:道徳の評価をどうするか

### 道徳科の現状

教えこみやしつけになっている

分かりきったことを教えている

授業が道徳的心情や態度に偏っている

### 教師主導から子ども中心の授業観の必要性

主体的な判断ができるような授業

変容を自覚できる評価

## 3. 研究方法

(1) 研究の3つの手立て

①「伝達・納得型」(A型) 授業と  
「受容・創造型」(B型) 授業の融合

②OPPA を通した自己変容の自覚化

③ICT 活用による学習履歴の蓄積

(2) 分析の対象

統合的道徳教育(「A型」「B型」授業)を実施

「A型」「B型」授業を複数時間で構成

「A型」…道徳原則

「B型」…例外・原則

Excel シートに毎時間、学習履歴を保存

批判的思考や俯瞰的見方などの記述(学習履歴)

学習前と後の本質的な問いのに対する記述(変容)

Lawrence Kohlberg ローレンス・コールバーグ

道徳性発達理論 3水準6段階

(教師の見取りの視点)

(3) 研究計画

5月「主として集団や社会との関わりに関すること」  
「公正, 公平, 社会正義」

9月「主として自分自身に関すること」  
「正直, 誠実」

6月「主として人との関わりに関すること」  
「親切, 思いやり」

10月～  
学習履歴の検証・分析

# 発達障害児童の自己理解に関する研究

学習デザインコース 大井山 恵

担当教員 武居 渡・川谷内 哲二

## 1 研究の目的

小学校段階の発達障害児の自己理解の意味とは何かを、児童の語りや行動変容から考察し、自己理解を促すために必要な教師の支援のあり方を明らかにする

## 2 研究の背景

小学校特別支援学級 児童の実態

- △自分の思いを理解、表現
- △人間関係の形成
- △集団活動への参加



就労状況(2015 報告)

- ・離職率 55.3%
- ・人間関係がうまくいかない 61.0%
- ・仕事内容があわない 49.2%



小林(2015)

当事者が、自分の特性を理解し、自分に合った生き方を自己選択できるような教育的支援が必要

石川(2015)

義務教育終了までに、少しでも自己理解が進んでいることが重要

職業生活満足度が高まるには

特性や配慮してほしいことを  
職場の人に伝えられること



## 3 第1研究(2022年9月-10月)

◇対象 K 大学附属特別支援学校 中学部3年生生徒

◇実践内容 自立活動 全6時間単元

授業デザインの視点「他者との関係性」「時間軸の設定」

時	活動の内容	視点との関係
1	自己紹介	自己意識をもつ
2	過去の自分のよさを知る	時間軸(過去) 他者(小学校時代の先生)との関係から
3	現在の自分のよさを知る	時間軸(現在) 他者(学級の仲間)との関係から
4		
5	未来の自分を想像する	時間軸(現在→未来) 自己意識をもつ
6	学習をふりかえる	自己意識の変化

◇分析方法

- ・生徒の言動
- ・ワークシートの記述量、記述内容の変容

◇結果・考察

- 自己に意図的に意識を向ける手立てが有効
- 他者との関係性の中で、自己を位置づけながら理解
- ・言語理解の力により、自己理解の内容に差あり  
→学習前段階に、言語理解アセスメントを

## 4 第2研究(2023年4月- )

◇対象 金沢市立小学校 特別支援学級(自閉症・情緒障害学級)児童

◇実践内容

I期 4月-5月  
実態把握と目標設定

II期 6月-9月  
自己肯定感を高める

III期 10月-12月  
自己理解を深める

自己理解の土壌づくり(自己に意識を向ける 他者との関係づくり)

言語理解アセスメント実施  
(J.COSS 日本語理解テスト)

抽出児童の決定

小集団活動で

- 自己に意識を向ける帯活動「お話タイム」設定
- ・得意なこと、苦手なこと両面から自己理解
- ・客観的に状況や感情をモニターする力を支援
- ・他者からフィードバックを受ける経験



個別・タイムリーに

- 教師との対話
- ・「自分はどうしたいのか」を自覚
- ・言葉と自分に適した表現ツール活用  
他者に説明



木谷(2014) 自己理解のプロセス

第1段階: 自分の得意さ・苦手さを理解すること

第2段階: 自分自身を理解するだけでなく、

障害特性を自分自身の言葉と自分に適した表現ツールを活用して他者に説明できること

◇分析方法

対象本人への聞き取り、小集団学習時の児童の言動、エピソード記述、対話の際に用いるノート

# 個別最適な学びと協働的な学びを効果的に組み合わせた社会科授業

～児童自らが学びを進めるための ICT 機器活用を目指して～

学習デザインコース 北田 幹人  
指導教員：加藤 隆弘、端崎 圭一

## 1. 研究の目的

小学校高学年社会科において、ICT 機器を主体的に活用した個別最適な学びと協働的な学びが、自ら学び、自ら考える力の育成につながるのかを明らかにする

## 2. 研究の背景・問題の所在

小学校での社会科授業⇒教科書指導中心  
これからの社会科の授業では・・・

知識獲得に重点



「なぜ」「どうやって」といった問いを児童自らがもち、問いについて調べ、自分の考えをもつ

「自らの問いをもち、解決していこうとする姿勢」



1) 学習意欲・自己効力感を高める

個別最適な学び



往還

2) 課題解決に向けて取り組んだ  
個別最適な学びを生かした

協働的な学び

## 3. 授業デザイン・研究方法・研究計画

### ①「個別最適な学びを取り入れた調べ学習」

調べる内容や方法を自己選択・自己決定させる。  
ICT 機器を活用することで、効果的に個の学びを進められるようにする。

### ②「協働的な学びを取り入れた学習」

ICT を用いて、効果的に協働的な学びの場を作る。  
「自分だったら…」「…を比べると」といった視点を持ち、全体で交流する学びを作り出していく。

### ③「個別最適な学びと協働的な学びの往還がある授業」

個別最適な学びから協働的な学びの往還を経て、自己の学びをメタ認知で振り返るというスパイラルの中で、児童が自己効力感を高められるのか、学習意欲がどのように変容するかを調べていく。



# 英語の授業における意見・考えの表出を促す指導方法の研究

学習デザインコース 坂井 美智子  
指導教員：滝沢 雄一、端崎 圭一

## 1. 研究の目的

生徒に社会的な話題について自分の意見・考えを述べる力を身に付けさせることを目指し、生徒の思考のレベルに着目した意見・考えの表出を促す単元デザインをおこなう。

## 2. 研究の背景

【課題】教科書で扱う社会的な話題について自分の意見・考えを話す活動で言葉が出てこない

【原因】①意見・考えを英語で表現するための知識が不足

②話す内容として意見・考えを持つことができない

【教師の思い】生徒の意見・考えの表出を促す授業デザインの必要感



## 3. 問題の所在

### アウトプット仮説 Swain(1985,1993)

アウトプットの際、学習者は文法処理をおこなうため、インプットした言語の構文や形式の習得に効果がある

【アウトプットの3機能】

- ①気づき (Noticing)
- ②仮説検証 (Hypothesis-testing)
- ③メタ言語的機能 (Metalinguistic function)

問題① インプットに比したアウトプットの不足

### 思考の分類 Waters(2006)

- 情報内思考
  - ①記憶 (Memory)
  - ②情報交換 (Translation)
- 情報を越えた思考
  - ③解釈 (Interpretation)
  - ④応用 (Application)
  - ⑤分析 (Analysis)
  - ⑥総合・創造 (Synthesis)
  - ⑦評価 (Evaluation)

低  
認知処理レベル  
高

問題② 認知処理レベルを徐々に上げる視点の欠如

## 4. 単元デザイン (問題①②の解決を目指して)

対象：県立高校普通科1年生  
単元の時数：6～8時間

### 情報内思考

【インプット】  
テキストを理解する



- ①記憶 覚えたことを使う
- ②情報交換 理解したことを整理する

### 情報を越えた思考

【アウトプット】  
知っていることや追加情報を基に表現する



- ③解釈 理解したことを基に表現する
- ④応用 グループで意見交換する
- ⑤分析 得た情報を分析する
- ⑥総合・創造 解決策などを話し合う
- ⑦評価 題材について考えを述べる

思考に必要な認知処理レベルを徐々に上げることで、生徒の意見・考えの表出を促す

## 5. 研究計画

4月

- 生徒の実態把握 (質問紙調査)

5月～7月

- 授業実践
- データ収集
- パフォーマンステスト

8月

- データ分析・考察

9月～11月

- 授業実践
- データ収集
- パフォーマンステスト

# 探究を支える教師の役割

学習デザインコース 田中哲也  
指導教員：加藤 隆弘・米倉敏広

## 1. 研究の背景と問題の所在

私のこれまでの総合学習：探究のプロセスを意識したプロジェクト型の探究的な学習

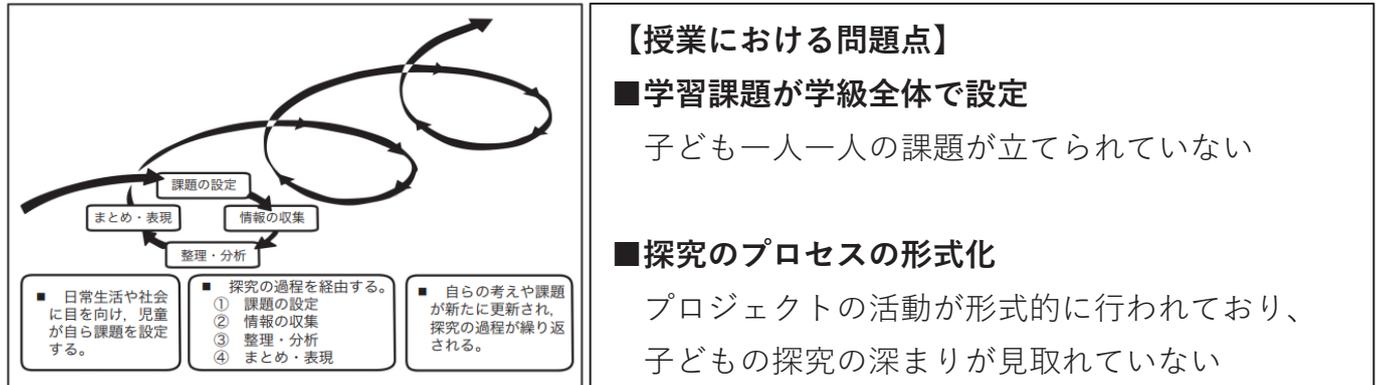


図1 学習指導要領解説 総合学習 H29 年抜粋

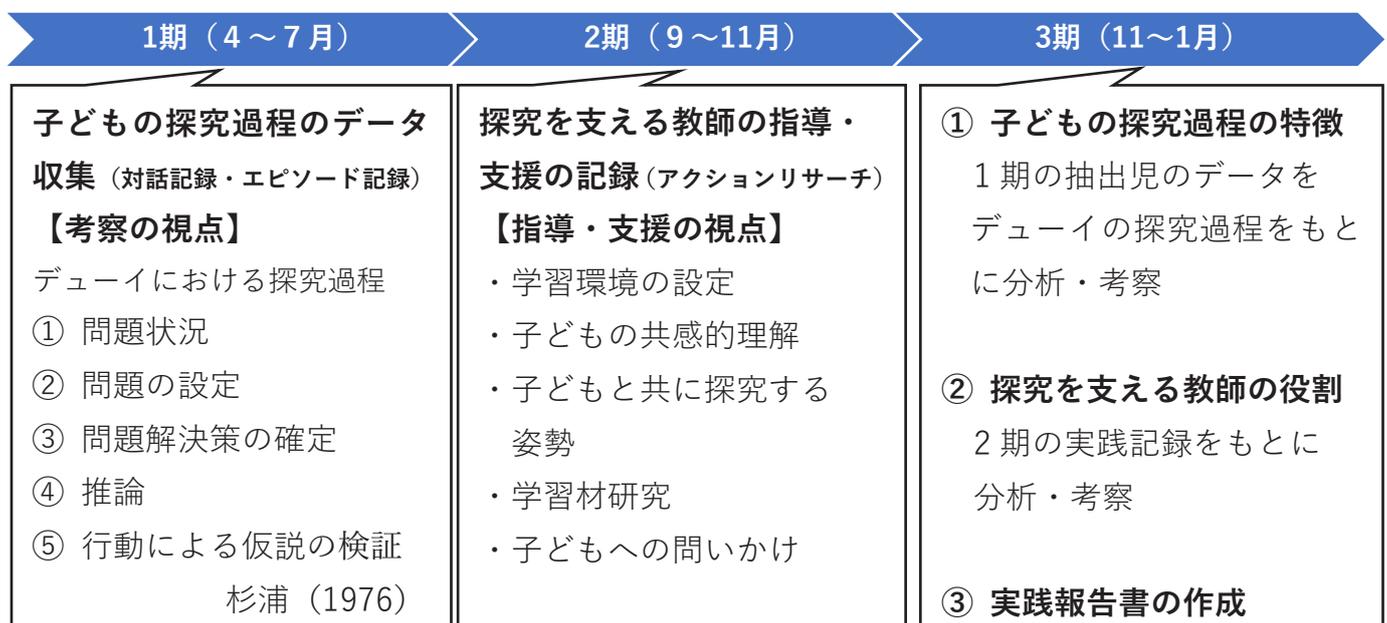
### ■ 藤井 (2008)

デューイの経験主義において**探究の過程は「段階」**でなく**一元的・連続的**に行われる  
→子どもはどのような探究のプロセスをたどるのか？  
子どもの探究を支えるために教師はどんな役割があるのか？

## 2. 研究目的

子どもの探究過程の特徴を考察し、探究を支える教師の役割を明らかにする

## 3. 研究方法・計画



# 多様な子どもたちとともにデザインする国語科の授業

## —自己決定の場を軸とした「読むこと」の指導実践から—

学習デザインコース 長谷川 鮎美 / 指導教員 本所 恵 ・ 米倉 敏広

### 1. 研究の背景

<大規模校で目の当たりにした多様な子どもたちの実態>

- ・学力差 ・発達障害 ・不登校
- ・複雑な家庭環境
- ・繰り返される生徒指導上の非行や問題行動



対応に苦慮する毎日 / 中学校は教科担任制ゆえ、授業のみの関わりもある

自分自身の授業の中で改善できることは何か?と模索

- あの手、この手を試してみたが…
- ◇見通しを持たせる工夫
  - ◇ペア・グループ活動の充実
  - ◇振り返り、ICTの活用 など



多様な子どもたちに対応しきれなかった現実

授業の中で、子どもたち自身が  
選択・決定できる場の設定が重要!

学習内容や学習方法

「個に応じた指導」の充実が必要

①指導の個別化 ②学習の個性化 の視点からのさらなる授業改善(▲画一的な一斉指導)  
(中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」より)

### 2. 研究の目的

通常学級の授業において、自己決定の機会が、国語科としての学力形成にどのような影響を与えるのかを  
子どもの学びの過程を考察することで明らかにする ※学力=学習指導要領に則った中学校国語科の育成すべき資質・能力と定義する

### 3. 研究の方法

4月～5月

6月～8月

9月～11月

12月～1月

【Ⅰ期】 生徒の実態把握 ⇒ 授業実践 ⇒ 考察・分析

◆興味・関心別、学習スタイル別指導(黒上1987)の導入

教師側が同一目標を達成すべく自己決定の場を設定する

- ◆資質・能力育成の観点から、達成目標が明確になるよう「ルーブリック」の内容を評価規準として“子どもたちとともに”議論する場を設ける
- ◆研究領域を[思考力・判断力・表現力等]の「C読むこと」に焦点化し、“段階的に”自己決定の場が広がるような授業デザインを試みる

【Ⅱ期】 再度、授業実践 ⇒ 考察・分析 ⇒ まとめ

◆興味・関心別学習(黒上1987)の導入

教師主体ではなく、学習者自らが自己決定の内容に関与する

～前提となる自分自身の授業スタイル～

- ①学習の見通しを確認 or 前時の復習を行う
- ②本時の目標の共有、課題を確認する
- ③個人で課題を考える
- ④ペアやグループで考えを交流する
- ⑤全体の場で交流する
- ⑥個人で授業のまとめ、振り返りを行う

自己決定の場の設定  
ルーブリックでの目標の共有化

課題を選択 or 課題を設定  
(言語活動に関連させる)

研究対象とする単元または授業では基本的に①～⑥の流れを変えずに実践を行う

【分析方法】

- ・抽出生徒の授業中のワークシートや振り返りの記述
- ・抽出生徒へのインタビュー
- ・パフォーマンス課題等の成果物
- ・授業映像
- ・web 実習ノートなどのフィールドメモの記述 等々

# 算数科における子どもの思考を支援する段階的な授業デザイン

学習デザインコース 安達千紗 指導教員 大谷実 川谷内哲二

## 研究テーマの背景

### H29 年告示学習指導要領

知識及び技能  
学びに向かう力・人間性  
思考力、判断力、表現力

育むためには

主体的で対話的な深い学びが必要

### H29 年告示小学校学習指導要領解説 算数編

問題解決の過程において、よりよい解法に洗練させていくための意見の交流や議論など対話的な学びを適宜取り入れていくことが必要であるが、その際にはあらかじめ自己の考えをもち、それを意識したうえで、主体的に取り組むようにし、深い学びを実現することが求められる。

## 研究の目的

算数科における「深い学び」の授業にするために、学びのプロセスの1つである児童の思考に注目し、様々な局面においてどのような支援が効果的であるか明確にすること

## 研究方法

### 問題の提示

既存の知識を活用できる問題の提示

既習問題と未習問題の比較できるもの  
日常生活に関連させたもの  
実物に触れる

### 教材の工夫

児童の思考が分かるような工夫

問題の横、問題の近くに吹き出し  
思考をすぐにかけるようなスペースを作る

### 交流の話し合い内容

交流の具体的な話し合いの内容を決める

「分かる」「分からない」で終わらない  
何が分かっているか、何が分かっているのか。  
どこまでわかったのか。

### 声掛け・発問

子どもの思考を引き出す有効な声掛け・発問

「今までとの違いは？」  
「どんな方法・結果になりそう？」  
「ほかの方法はないかな？」

【児童の思考が変化と思われる4場面】 例：小学校5年生 倍数と約数

#### 1 問題と出会う

・手拍子が重なるときはどんな時だろう  
・重なるときに決まりがありそう

#### 2 他の人の気づきを聞いて

・本当にそうなのか、確かめたいな  
・次は24になったよ

#### 3 解法についての気づき、疑問

・公倍数は16だと思っていたのに8だった  
・最大公倍数ってあるのかな

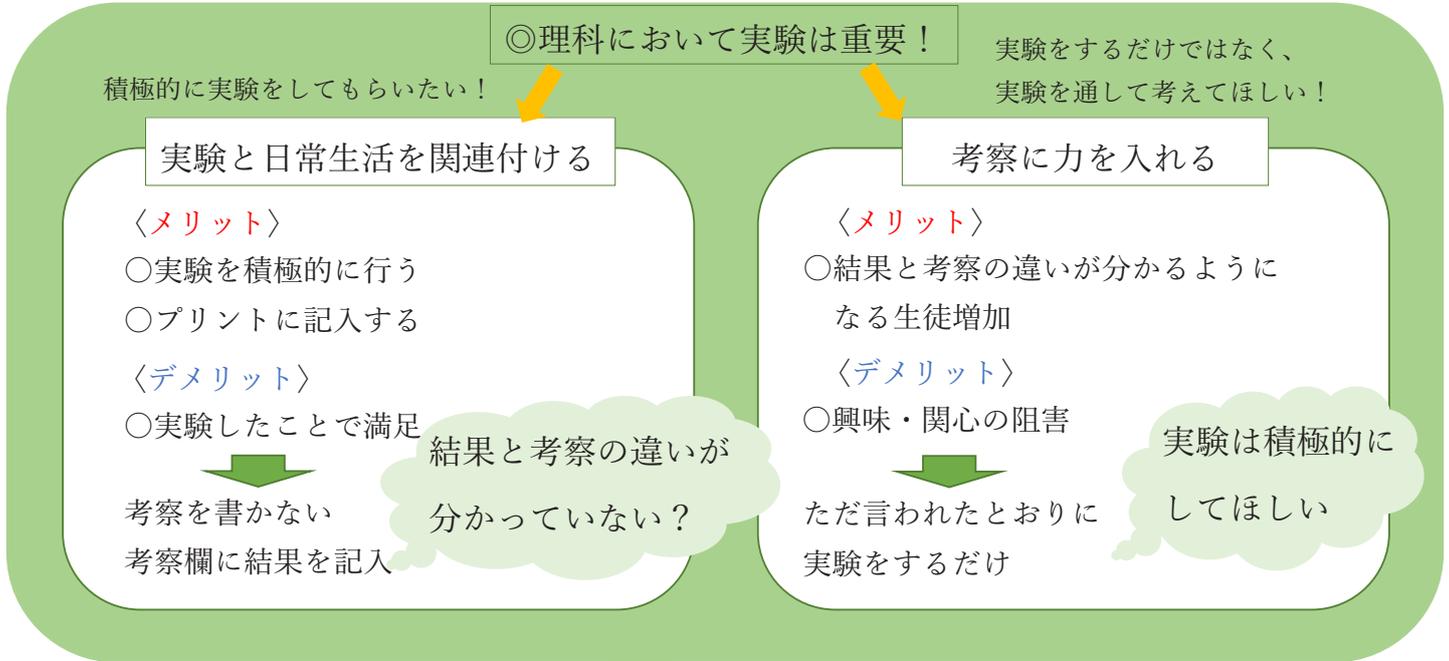
#### 4 共有での気づき、発見

・3つの数だとどうやって求めるのか気になった

# 中学校理科における日常生活と関連付けた授業 —実験を通して科学的に考える力の育成—

学習デザインコース 川上未有希 指導教員 大谷実 川谷内哲二

## 1. 問題の所在



## 2. 研究の目的

メリットを活かしつつ、考察が書けるように！

○実験結果は…となった。このことから、～と考えられる。

×実験結果は…すると、…となった。

日常生活と関連付けながら、  
実験結果を用いて考察が書けるようになる授業デザインの提唱

## 3. 研究方法

### 【実践方法】

○日常生活と関連付けることが、積極的に  
実験をする最適な方法であると考えている

### ①日常生活との関連付け

山内ら(2022)

○考察の書き方の指導を受けたことにより、  
考察の書き方に改善あり

### ②書き方の例示

- 口頭説明、ワークシート
- 生徒の様子を見ながら、例示の数の  
減少、変更

山内ら(2022)

○協働的な学びを通して、考察の書き方が  
分かるようになる

### ③考察の共有

- 新たな視点を得る
- 考察の書き方を生徒同士で確認

### 【分析方法】

#### ①抽出生徒へのインタビュー

- 日常生活との関連付けにより、  
**実験への意識**が変わったのか
- 書き方の例示により、**考察を書く際の  
意識**が変わったのか

#### ②理科学用語、関連用語の語数

- どれだけの用語**が使用されているか
- 例示の数の減少、変更する前後での  
**語数の変化**

## 4. 本研究の期待される成果

日常生活と関連付けることにより、積極的に実験を行うようになる。

結果と考察の違いを理解し、実験結果を用いて考察が書けるようになる。

# 中学校外国語科における 互いの考えや気持ちを伝え合う 対話的な授業デザイン

学習デザインコース 斎藤美紀 (指導教員 滝沢雄一・端崎圭一)

## 研究の目的

中学校英語科の授業で、教師が生徒と対話的なやり取りを重ねる過程を考察し、生徒が即興的にやり取りをする場面の発話の質にどのような変化が生じるのかを明らかにすること。

## 問題の所在

学校実習Ⅰ(協同学習)の抽出グループの発話記録

⇒ 英語で新たな知識を構築できたのか？

- ✓知識の評価方法が不明瞭で検証が難しかった。
- ✓生徒との対話の大半が形式的なやり取りだった。
- ✓中学生が伝えたいことと英語で表現できることの間、葛藤が生じている可能性が推察された。



※教師が生徒とのやり取りに用いる支援方略の一つ。

## 研究の背景

### 1 中学校学習指導要領解説 (2018)

「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が不足している。

新出の語彙や言語材料の定着を図る【練習】が中心である。

既習の知識を活用する【言語活動】とのバランスを大切にしたい！

### 2 量的研究について (野村, 2018)

Teacher Talk の比率が高いと生徒の英語使用率が高まる。

生徒の発話の質を高めることが今後の課題である。

教師の語りと生徒の発話の【相互作用】を明らかにしたい！

### 3 質的研究について (東條, 2014)

公立中学校での内容重視のコミュニケーションに関する実証研究が少ない。

学級単位での協働的な対話を保障する教師による働きかけが必要である。

Teacher Talk を【足場かけ】とする授業をデザインしたい！

## 授業の方策

MERRIER Approach (渡邊, 2003) の視点を取り入れた Teacher Talk を実践し、理解しやすい英語を聞かせてインプットを増やす。

指針	定義
<u>Model/Mime</u>	身振り・手振り・視聴覚教材などの言外情報を活用することや、見本を示すこと。
<u>Example</u>	抽象的な内容を具体的に示すこと。
<u>Redundancy</u>	同一の内容を別の発想で言い換えること。
<u>Repetition</u>	大切なことを繰り返すこと。
<u>Interaction</u>	学習者と相互交渉をすること。
<u>Expansion</u>	学習者の発話を補強して繰り返すこと。
<u>Reward</u>	学習者の反応に対して肯定的なコメントをすること。

出典：『英語が使える日本人の育成：MERRIER Approach のすすめ』(p.4)

自信をもって英語で自分の考えを伝え合う力の育成



【設計】意味内容に焦点を当ててやり取りする機会 + 意味交渉の文脈

## 研究の方法

### 【実践計画】

第Ⅰ期 (4～5月)	第Ⅱ期 (6～7月)	第Ⅲ期 (9月～10月)	第Ⅳ期 (10月～11月)
<u>生徒の実態把握</u> * 問題の所在を明確化 * スモールステップの設計 * 意識調査など	<u>授業実践① (例)</u> 自分が好きなことや得意なこと、将来に役立てたい自分の長所は何だろう？	<u>授業実践② (例)</u> 自分と異なる生活習慣や文化を持つ相手と暮らす時に大切なことは何だろう？	<u>授業実践③ (例)</u> “皆”が暮らしやすい社会をつくるために必要な道具やサービスは何だろう？

### 【データ収集と分析】

- \* 録画・録音データの収集 ⇒ フィールドノート・発話記録の作成 ⇒ 生徒の発話を品詞・語彙・言語材料の点で分析する。
- \* 生徒のふり返りなど成果物の収集、抽出生徒へのインタビュー、質問紙による意識調査 ⇒ 生徒の内面的な変化を見取る。
- \* web 実習ノートへの省察、教師の発話を SETT モデル (Walsh, 2006) で自己評価する。

※Self-Evaluation of Teacher Talk: 教室談話を4領域に分け、発話の特徴を分類するための参照枠。

# 多様な言語・文化背景を持つ生徒に対する高校国語科の授業

## — 生徒間の相互理解を目指す言語活動 —

学習デザインコース  
指導教員

武藤 美紗希  
本所 恵 米倉 敏広

### 1 研究の背景

高等学校へ進学する

多様な言語・文化背景を持つ生徒 = **CLD生徒**(Culturally Linguistically Diverse Students)の増加

外国人散在地域における  
CLD生徒への関心の希薄さ

教科の専門性に着目した  
CLD生徒への実践事例不足



日々の授業に  
参画できないCLD生徒

CLD生徒への指導に悩む  
教職員、サポーター



CLD生徒の中退率及び  
非正規就職率の高さ



教科(本研究では国語科)の教科指導の場面における方策の検討の必要性

### 2 研究の目的

国語表現 「思考力、判断力、表現力等」の科目目標

(新学習指導要領より)

論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における**他者との多様な関わりの中で伝え合う力**を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。



多様な言語・文化背景を生かした  
言語活動の設定

多様な言語・文化の存在への理解  
自分自身が持つ言語・文化への理解  
他者との交流のための言語ツール(国語)の習得



日本語を母語とする生徒

多様な言語・文化背景を持つ生徒

**CLD生徒の多様な言語・文化背景を生かす言語活動を設定することで、生徒に起こる変容について分析を実施**

### 3 研究の方法

変革的マルチリテラシー教育学の  
アイデンティティ・テキストを取り入れた  
国語表現の授業単元のデザイン

CLD生徒／日本語を母語とする生徒の分析  
アイデンティティ・テキスト、振り返りワークシート

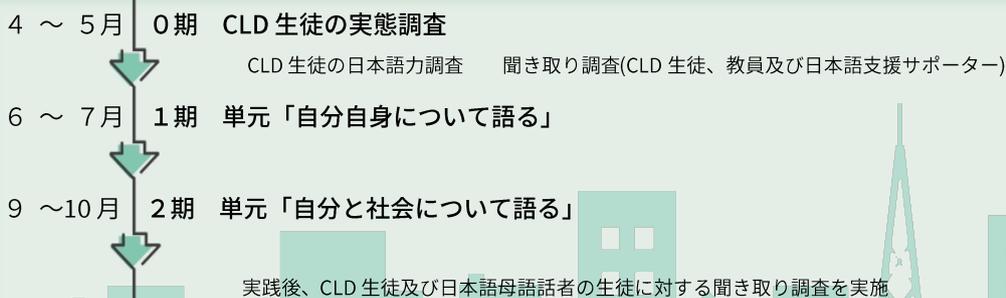
#### 変革的マルチリテラシー教育学 カミズ・中島(2021)

CLD生徒が言語活動を通じ、自身のアイデンティティを  
確立できるよう働きかける教育的取り組み

#### アイデンティティ・テキスト

- 母語と現地語(本研究では日本語)の両言語を用い、CLD生徒が書いた自由作文
- IT機器の利用や複数人の協力を得て作成
- 形式(口頭、映像、舞台)不問

### 4 実践計画



# 多様な背景を持つ生徒への指導に悩む担任を学年組織で支える

## —全体のプロセスを学年主任がコーディネートしていく—

学校マネジメントコース 小岩正敏

指導教員 萱原道春・小浦 寛

### 1 研究の背景

本校知的障害教育部門高等部の学級担任の悩み…

「多様な背景を持つ生徒」への指導

発達障害のある生徒・自閉的傾向の強い生徒・不登校の生徒 等

担任一人が抱え込んでいることが多い

しかし

担任一人での抱え込みには限界がある

個別教員の知識技能の範囲を越える場合は個業型組織の有効性を保持できない(佐古 2006)

なぜ担任一人の抱え込みになってしまうのか

他教員の相互不干渉を起こしている学校組織としての風土があるのではないかと

教員間の相互不干渉や放任を導きかねない「同僚性」を支えに、教員が各々の占有的領域を墨守した上で、他の職との連携を説くに留まっている(榊原 2020)

そこで

教員の協働による組織的な対応が必要となる  
協働組織にするにはメンバー同士の自己開示が必要

援助チームにおける協同が成立するには、その場が、メンバー同士がほっと息をつき自己開示のできる場でなければならない(萱原 2014)

特別支援学校においても対話から仲間を増やし、やがて協働組織へとつなげる

試みに賛同してくれる同僚を地道に増やし続けることで、教員の協働関係を軸とした教員集団の力量形成につながる(大井 2021)

本研究では

学年団を「援助チーム」として位置付け、対話を基盤とした組織作りを目指す

### 2 研究目的

担任裁量の個業化した組織から、チームとして取り組んでいく組織への変換を目的とし、学年主任がコーディネーターとなった協働の取り組みを通して、学年団を中心とした援助チーム活動の有用性や要点を明らかにする

### 3 研究方法

◇ 研究対象: 学年の教員全員

◇ 運営方法: 学年主任の立場で

- ・協働の取り組みのコーディネーターを行う
- ・多様な背景を持つ生徒への指導に関する悩み相談窓口となる
- ・必要に応じて「知高〇年ケース会議」を行う

◇ 研究方法: PDCAサイクル

#### P(計画)

- ① 窓口が担任から悩みを調査(普段の何げない会話などから)
- ② 窓口が重そうな事案にスポットを当て担任と再び面談  
生徒理解カードを担任と共に作成(問題、家族、育成歴 等)
- ③ 窓口が解決に向けたプログラムを作成
- ④ 「知高〇年ケース会議1(援助学年チーム)」の開催  
学年教員全員が集まり該当生徒についてのエピソードを集積し理解を深める【フレンストーミング】
- ⑤ 「知高〇年ケース会議2(援助コアチーム)」の開催  
窓口、担任、副担任、部主事の計4人が集まり、エピソードデータから全体像を作り上げる【KJ法】
- ⑥ 「知高〇年ケース会議3(援助コアチーム+α)」の開催  
援助コアチーム4人とその他教員(事案によるが校内の多様な背景を持つ生徒への指導を得意としている教員等)が集まり、当該生徒の全体像を基に指導方針を決める
- ⑦ 「知高〇年ケース会議4(援助学年チーム)」の開催  
学年教員全員に指導方針を提案し共通理解

#### A(改善)

- ⑩ 「知高〇年ケース会議6(援助コアチーム)」の開催課題を改善するために何が必要かの洗い出す  
※課題が解決しない場合は再び【P③へ】

#### 「知高〇年ケース会議」の設定

- ・学年会(月1回)
- ・放課後(必要に応じて回数を設定)

#### D(実行)

- ⑧ 指導方針のもと、提案事項を実際に当該生徒に対してアプローチする  
・子どもの変容を観察(学年教員全員の目で)  
・窓口はケースによって当該生徒に対する良き理解者となり、生徒からの相談も受ける

#### C(評価)

- ⑨ 「知高〇年ケース会議5(援助学年チーム)」の開催  
アプローチした子どもへの変容はどうだったか、課題はなかったか

◇ 研究期間: 4月中旬～10月(PDCAサイクルの取り組みで1サイクルで解決しない場合は2・3サイクルとつなげ課題解決を目指す)

# 若手教員のエンパワメントを促進する組織づくり

学校マネジメントコース

小林 達郎

指導教員

鈴木 瞬・新村 裕二

## 1. 研究の背景

- ・若手教員の増加、ベテラン教員の減少
- ・教員の指導力、教育の質の低下への懸念

若手教員の早期育成の必要性

石川県「若手教員早期育成プログラム」

昨今の課題…

- ・教員採用試験の倍率低下や教員不足
- ・多忙で「ブラック」な職場イメージ
- ・初任の離職率上昇



「寄り添い、支え合い、共に歩む」必要性

## 若手教員をエンパワメントする「若プロ」

## 2. 問題の所在

やりがい 自信 自己効力感

教員のエンパワメントとは、「一人ひとりの教師が『自分の課題意識やアイデアをもって取り組めば、必ず何かを実現できる』という積極的な思いを抱くことができる状態」（浜田2012）



若手教員のエンパワメントが促進された具体的場面（鮫島・瀬戸2017）  
「児童、生徒が成長、変容する姿」「学習・生徒指導への努力に対する子供の反応」  
「同僚からの支援、励まし」「上司からの称賛」「業務に対する見通しが持てること」



「学校の『共有ビジョン』形成のプロセスに教師が参加することは、教師をエンパワーする」（浜田2012）  
（例）学校研究や校務分掌等 → 目標や取組への若手教員の意見反映

教員のエンパワメントを促進する研修の条件（榊原・大和2005）から

- ①若手の「経験や観念を資源」と捉え、若手「どうしのかかわり」を促し、活躍する場を設ける
- ②当たり前とされる「論理や感情に分け入って」「背景や既定要因を共に深めよう」とする「協働的な態度」
- ③「空間と時間の条件を整備」し、「共に考え、感じ」られる「擬似共同体」を企画・準備する

「共有ビジョン」形成プロセス  
若手の参加・意見反映

OK!

いい授業って  
どんな授業かな？

皆さんはどんな時に  
どう褒めてるの？

多様な「観」

納得

〇〇を目指す

やってみよう



【研修のファシリテーター】  
「教える」ことよりも「問いかけて、出されたものを組み合わせる」役割。参加者皆に相対化させ、捉え返すよう働きかけ、若手教員の内面に影響を与える。



## 3. 研究の目的

「若プロ」を通して、若手教員のエンパワメントを促進する学校組織を構築すること

## 4. 研究方法

①教員のエンパワメント調査（予備調査：2023年2月実施）

②研修内容のデザイン

予備調査結果、先行研究の促進要因や研修の条件から、「若プロ」（定期的研修・日常的OJT）を、エンパワメントを軸にして組み直す

③エンパワメントの促進の検証

質問紙調査、インタビュー調査、組織市民行動（Organizational Citizenship Behavior; OCB）

報酬のためでない組織のための個人行動

# 生徒の当事者性をエンパワーする学校組織づくり

## －制服見直し実践を通じた教職員の協働体制の再構築－

学校マネジメントコース 橋本優子 指導教員：鈴木瞬・小浦寛

### ◆エンパワーの定義◆ (平田2007)

“学校的意思決定プロセスに参加することによる様々な知識やスキル・経験の獲得の促進”

### ◆研究の背景◆

2022年度

・成年年齢の引き下げ ・現代社会→公共  
高校生の社会参画意識の向上が期待される  
も、日本財団の18歳の意識調査で「自身  
と社会の関わりについて」の全項目で日本  
の若者は6か国中最下位である

△日本の若者の当事者性の低さ△

### ◆問題の所在◆

2022年度

女子生徒がスラックス・ネクタイ選択可能  
になり、アンケートでは「履いてみたい」  
という生徒が約2割いたが、新入生を含め、  
購入者が未だ0名である→違和感



## 課題1：生徒の参画

ロジャー・ハート(2017)参画のハシゴ  
石井(2020)自分ごと化のフェーズを参  
照し、生徒の参画のプロセスを意識した  
実践を目指す

## 課題2：教職員の合意形成

平田(2007)学校評議会への参加の生徒を  
エンパワーする可能性生徒のエンパワメ  
ンと達成には組織の見直し・協働体制の再  
構築の視点は不可欠である

### ◆研究の目的◆

身近な“制服”の見直しを題材にし  
て、生徒が課題に「自分ごと」とし  
て向き合い、当事者性をエンパワー  
するプロセスにおける教職員の協働  
について検討すること

### 生徒の変化 Mitra2004/古田2022

Agency エージェンシー	・他者に意見を明確に伝える能力の向上 ・変革の主体としての新たなアイデンティティの構築 ・リーダーシップ感覚の向上
Belonging 所属感	・気にかけてくれる大人との関係の構築 ・教員との関わり改善 ・学校への愛着を高める
Competence コンピテンス	・自身の環境への批判的視点 ・問題解決やファシリテーションスキルの育成 ・他者と協調する力 ・パブリックな場で話す力



「どんな力をつけたいか」

### ◆プレ実践◆

- ①生徒指導課長へのヒアリング調査
- ②昨年度アンケート分析
- ③教職員の意識調査 M-GTA分析



### ◆プレ実践から見えた課題◆

- ・情報共有・合意形成の不確かさ
- ・教師の配慮と生徒のニーズの齟齬
- ・制服が強みの学校組織として制服  
そのものの位置づけを捉え直す必要性

### ◆研究方法◆

プレ実践で見えた課題をもとに、実践者がファシリテーターとなり

- ①“生徒の参画”に焦点をあてて校風委員をアップデートし制服見直しを実践する
- ② 教職員の協働に不可欠な組織の合意形成や対話の在り様を研究・検討する

# 医療的ケア児を担当する教員と学校看護師が 協働していくための体制づくり

学校マネジメントコース 吉藤菜美子 指導教員 萱原道春・新村裕二

## 研究の背景と問題の所在

<本校の現状>

①医療的ケア児、学校看護師の増加



教員と学校看護師の協働が不可欠

しかし、職種の違いにより教員と学校看護師の価値観、考え方にズレがある。



医療的ケア児とは

日常生活及び社会生活を営むために経管栄養や喀痰吸引、酸素療法等、恒常的に医療行為を受けることが不可欠である児童生徒のこと

## 教員と学校看護師へのアンケート調査結果

(R3.11~12月実施)

- ・安全に対する認識のズレ
- ・曖昧な仕事の線引き
- ・情報伝達体制の課題
- ・対話不足
- ・教育と安全の両立の難しさ



<先行研究> 協働課題

- ・鈴木ら(2014): **情報交換**の機会がない
- ・山本(2017): 看護師が**個別の指導計画**に関わっていない
- ・植田ら(2018): 協働は**価値観を尊重**し合うことで成立
- ・谷口(2017): **協働を構築する時期は、コンフリクト**が生じやすい**目標**に対し、皆で知識を絞り、皆の合意のもと再度評価し修正する過程を繰り返すことが必要

## <協働していく体制づくり>

- ・ **話し合いの場の確保**・ **お互いの価値観の尊重**・ **児童生徒の目標を共有**
- ・ **教員が「旗振り役」となって協働を深めることを目指す**

☆協働の姿

教員も学校看護師も、お互いの価値観を尊重しつつ対話を重ねながら児童の目標達成のための最善策を考えていく姿



## 研究目的

- ・教員と学校看護師が**話し合う場**を設定し、**相互理解**を基盤に**協働**に対する**意識の変容**を目指す
- ・協働を深める**ファシリテーター**の役割を明らかにする

## 研究方法

<研究計画> **コラボレーションの会**①②を定期的に設定、ファシリテーターとして会を運営する

①肢体小学部会(後半)	月に1~2回	(30分程度)	肢体小学部教室
②小中高合同肢体不自由教育部門会(後半)	年に4回程度	(30~60分程度)	多目的室
③日常的な情報共有			

<研究方法>

- ・児童生徒の目標をもとに**意見交換**
- ・**合意のもと最善策**を実施し、結果を再度評価し修正
- ・アンケート、エピソード記録等から、対象者の変容のきっかけを考察(アクション・リサーチ)
- ・どのようにファシリテートしたか記録、対象者の変容とのつながりを考察



価値観を尊重し対話するための土台をつくる。  
対象者の**協働に対する意識**に変容があったかをまとめる。



---

2022 年度 金沢大学教職大学院フォーラム報告書

2023 年 8 月 発行

発行所 金沢大学大学院教職実践研究科

---

